

常態化する中国空軍第 3 世代戦闘機のチベット進出

漢和防務評論 20131224 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中印国境方面への中国空軍部隊の進出に関して漢和防務評論に関連記事がありましたので紹介します。

中国空軍はチベット地区飛行場への第 3 世代戦闘機による機動展開訓練を常態化させているようです。その目的は、チベット地域での作戦に慣熟するためであり、訓練部隊は雲南省、四川省の飛行部隊のようです。

記事によると、インド空軍の装備機種である SU-30MKI は、中国空軍のどの機種よりも性能が優れ、チベット地域の制空権獲得競争は圧倒的にインドが有利としています。

KDR バンコク特電：

ラサでの実地見聞及び衛星写真を総合判断すると、2012 年以降、中国空軍第 3 世代戦闘機 J-11 及び J-10 のゴンカル飛行場への進出がすでに常態化している。もう一つの軍民共用飛行場であるシガツエ飛行場は、しばらく軍用機の飛来はなかったが、最近軍用機の使用が開始された。

特に 2013 年になってから、第 3 世代戦闘機の一つ大隊規模の進出が大幅に増加した。2013 年 1 月 13 日には、5 機の SU-27/J-11 が展開し、6 月 7 日まで駐留していたようだ。この日の衛星写真によると、3 機の J-11 が見られた。6 月 10 日には、5 機の J-10A が進駐を開始した。進出が常態化した理由は、輪番訓練のためであり、進出部隊は、雲南省航空兵第 44 師団及び四川省大竹の航空兵第 33 師団である可能性が高い。当然その他の第 3 世代戦闘機部隊の輪番訓練の可能性も排除できない。進出規模が 1 個大隊であることは補給に問題があることを示唆している。一度に 1 個連隊規模 (24 機) の進出は出来ないようだ。

6 月 10 日には IL-76 が 1 機、同飛行場に進駐しているのが発見された。この機体は J-10 の補給支援をするために来た可能性がある。空軍が使用する基地は、通常おおよそ 11 棟の緑色屋根の建築物と 4 棟のブルー色の建物が建設される。このことから、この基地の規模は大きくはないようだ。7 基ある燃料タンクは民用らしい。軍用の燃料タンクは飛行場の西側に建設され、3 基が大型タンクで 2 基は小型である。地下施設及び SAM 陣地は発見されていない。

しかし一方のシガツエ飛行場には HQ-9 型 SAM 陣地が建設された可能性が極めて高い。KDR は、戦時に多数の戦闘機が進出するのはシガツエ飛行場であると

判断している。民用エリアが小さく、しかも軍用エリアの施設が大きく、典型的な空軍司令部の建設方式を採用しているからだ。48棟の各種建築物及び車庫がある。一方民用のエプロンは小さなターミナルビルが一つあるだけで、ボーディングブリッジはない。一方のゴンカル飛行場にはボーディングブリッジが5基もある。したがってシガツエ飛行場の民用機の処理能力は相当低い。

主滑走路を見ると、ゴンカル飛行場は4000Mであるが、シガツエ飛行場は5000Mあり、抗湛性が高い。シガツエ飛行場は軍用を主とする飛行場であることは確かである。

インド軍と比較すると、インドはTESPURにSU-30MKI戦闘機を配備しつつある。2012年には飛行場の改修を開始し、2013年2月に建設を終了した。この飛行場には中国空軍第3世代戦闘機の格納庫と同様に24個の長屋式格納庫が建設された。SU-30MKI多用途型戦闘機は、機動性及び対地攻撃能力面で中国の如何なる第3世代戦闘機よりも優れている。このことは、インド空軍の第3世代戦闘機は性能、数量、快速反応面で中国を圧倒し、チベット空域における制空権はインドが獲得することを意味する。

TESPURに配備されたSU-30MKIは、中国軍の重要な補給路である青藏鉄道を精密に攻撃し、同時にチベット地域の全ての中国空軍基地を攻撃することが出来る。

SU-30MKIは、中印国境からわずか185KMに所在するCHABUA空軍基地に進出しつつある。2011年にはこの基地に7機のSU-30MKIが進出した。2012年に飛行場の改修が開始され、8個の円屋根式格納庫が建設された。このことは、平時から8機のSU-30MKIが配備される可能性があることを意味する。

近年来、中国空軍は、ベトナム方面に着意した配備を採りつつある。雲南省方面へのSU-27/J-11型機の頻繁な機動展開訓練が確認されている。雲南省方面の気候はチベット地域よりもはるかに良好なので、J-11/SU-27の展開規模は、チベット方面よりもはるかに大きい。

陸良の航空兵第44師団にはすでに28機のJ-10Aが配備されている。この基地は、2個連隊で編制され、もう一つの連隊はJ-7型戦闘機である。2011年4月には少なくとも15機のSU-27/J-11がこの基地へ展開したことが発見された。また1機のH-6爆撃機も確認された。陸良基地は沿海地域の日、米、台湾の情報収集範囲から離れているため、中国空軍は、同基地をJ-10AとSU-27/J-11の対抗訓練に利用している可能性が極めて高い。

ベトナムは、現在航空戦力を強化しつつあり、2013年に12機のSU-30MK2を輸入するための協議を開始することに合意した。合意すれば、ベトナムは20機のSU-30MK2を保有することになる。ハノイに駐屯する第371師団第921連

隊は 17 機の改修が終った SU-22M4 を保有している。THO XUAN の第 923 連隊には新型の SU-30MKV が配備されている可能性が極めて高い。この基地には新たに 12 個の長屋式格納庫が建設された。また 4 個の格納庫には SU-22 が入っているようだ。この基地は中越国境から 260 乃至 350 KM あり、北部に配備された唯一の SU-30 戦闘機部隊のはずだ。

第 372 師団第 940 連隊は PUT CHAT に配備され、衛星写真により 1 機の SU-30MK2 と 6 個の格納庫が発見された。発見された機種は SU-30 か SU-27 かは明確でない。南方の辺和飛行場に 12 個の格納庫が建設された。ここは最初の SU-30MK2 の駐屯地で、第 370 師団第 935 連隊が駐屯するようだ。したがってベトナム空軍は 3 個の空軍部隊がスホーイ型戦闘機を装備することになる。

以上